

<小学校 国語>

伝えたいことをよく分かるように話すことのできる児童の育成

－教材の選定、相手・目的意識の明確化、言語環境の整備を通して－

知念村立知念小学校教諭 比 嘉 頼 子

分かりやすく話す力を付けるためには、児童が「話したい、聞きたい」と思える教材の選定が重要である。そこで、興味を持って取り組めるような教材の選定に努めた。また、相手・目的意識を明確にした学習指導の工夫、話す順序や内容を整理するためのワークシートやカードの工夫、学習形態の工夫に取り組んだ。さらに、話すことへの抵抗を和らげるために、言語環境の整備を試みた。

その結果、順序に気をつけながら、みんなに聞こえる声で話すこと、つまり、伝えたいことをよく分かるように話すことができるようになった。

【キーワード】 興味 順序 教材選定 相手意識 目的意識 言語環境の整備

目 次

I テーマ設定の理由	31
II 研究内容	32
1 興味を持って取り組める教材の選定	32
2 相手意識・目的意識の明確化	33
3 言語環境の整備（話しやすい学級づくり）	33
III 授業実践	35
1 単元名	35
2 教材名	35
3 単元設定の理由	35
4 単元の指導目標	35
5 単元の指導計画	36
6 本時の指導	37
IV 研究の考察	39
1 興味を持って取り組める教材の選定	39
2 相手意識・目的意識を明確にした指導	39
3 言語環境の整備	40
4 伝えたいことをよく分かるように話そうとする児童の育成	40
V 研究の成果と今後の課題	40
1 研究の成果	40
2 今後の課題	40

<小学校 国語>

伝えたいことをよく分かるように話すことのできる児童の育成

－教材の選定、相手・目的意識の明確化、言語環境の整備を通して－

知念村立知念小学校教諭 比 嘉 頼 子

I テーマ設定の理由

「伝え合う力を高める」ことが、学習指導要領の目標に新たに加わった。今回の改訂では、言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善が図られており、「話すこと・聞くこと」が一つの領域にまとめられた。「話すこと・聞くこと」が、最初に位置づけられているのは、「自分の考えを自分の言葉で積極的に表現する能力や態度」を育成することが重視されていることを示している。低学年においては、「事柄の順序を考えながら話すこと」や「大事なことを落とさないように聞くこと」の力を育て、「話し合おうとする態度」を育成することが主なねらいとしてあげられている。言語は、人と人とを結びつけるものであり、自分の思いや考えを、相手に分かりやすく伝えるということは、国際化、情報化社会を生きていくこれからの子どもたちにとって大切なことである。

多くの児童は、おしゃべりは好きであるが、自分の意見を人前で筋道を立てて話すことは苦手である。これまで「朝の1分間スピーチ」を取り入れ、場の設定をしてきた。ところが、話にふくらみがなく、いつの間にか単調なものになっている。また、「話すこと・聞くこと」の授業を通して「相手によく分かるように話す」指導をしてきたが、十分に力を付けたとは言えない。これは、単に話し方や聞き方の技能習得を目的とした指導を行ってきたことに原因があると言える。技能を教え込む前に、話すこと、聞くことがなぜ大切かということを明確にする必要があったのではないかと考える。つまり、お互いのことを知り、分かり合うために話したり、聞いたりするのだということを理解させなければならなかった。また、内発的動機付けが不十分であったことも、原因としてあげられる。児童の「話したい、聞きたい」という思いを大切に話した話材、教材の選定が必要であったと感じる。併せて、言語環境を整備することも必要であった。「話すこと・聞くこと」の力を培う基盤となるのは言語環境であり、とりわけ、話しやすい学級、つまり話したことを受け入れてもらえるような環境がなくては、話すことへの抵抗をなくすることはできない。

児童が意欲を持って生き生きと話すことができるようにするために、伝えたい話題があること、伝えたい相手がいること、話す方法を身につけること、話しやすい学級であることが必要である。そのためには、「話したい、聞きたい」と思える教材を選定し、また、分かりやすく話す力を付けるために、「話すこと・聞くこと」の基礎・基本を明確にし、話す順序や内容を整理するためのワークシートやカードを工夫したり、学習形態の工夫をしたりしたい。さらには、言語環境を整えるため、ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターを取り入れ、話しやすい学級をつくることにより、伝えたいことをよく分かるように話す能力を育成していきたいと考える。

そこで、興味を持って取り組める教材を選定し、相手意識や目的意識を明確にした学習指導の工夫、言語環境の整備をすれば、伝えたいことをよく分かるように話す児童を育成できようと考え、本テーマを設定した。

<研究仮説>

「話すこと・聞くこと」の領域において、興味を持って取り組めるような教材の選定、相手意識や目的意識を明確にした学習指導の工夫、言語環境の整備をすれば、伝えたいことをよく分かるように話す児童を育成することができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 興味を持って取り組める教材の選定

児童が興味を持って話したり聞いたりして、その結果、話してよかった、聞いてよかったという満足感を持つためには、発達段階に応じた適切な教材、話材の選定が重要な意味を持つ。指導要領には、「音声言語のための教材を開発したり活用したりするなどして指導の効果を高めるように工夫すること」とある。そこで、教科書教材のみならず、児童の主体的な言語活動が展開できる適切な教材の選定に努めた。また、「話すこと・聞くこと」の力を育てるためには、各学年の話すこと・聞くことの指導事項を明らかにし、年間指導計画を立て、意図的・計画的な指導をする必要がある。そこで、教材の選定をし、配列を試みた。例えば、表現力をつけるために各学期に1回「ショー・アンド・テル」を位置づけた。「ショー・アンド・テル」とは、実物や絵を見せながら話す方法である。それから、2学期にはディベートゲームを取り入れた。低学年では、ディベートの基礎力を培うことが大切だと考えたからである。(表1)

表1 教材選定「話すこと・聞くこと」(30 時間)

	1 学期 14 時間	2 学期 8 時間	3 学期 8 時間
●教科書教材 ○選定教材	○あいさつリレー (1 時間) あいさつのしかたを身につけ、いいあいさつを体験することで、心地よさを味わい、進んであいさつができるようにする。 ●ともこさんはどこかな (4 時間) 迷子を探しだせるように、迷子の特徴となる大事なことを選び順序よく話す。大事なことを落とさないように聞く。 ○うれしい話の聞き方 (1 時間) 話を聞く態度の違いからくる不快感と気持ちの良さを対比的に体験することにより、日常的に行動をふりかえり、積極的に話を聞く意欲を持つきっかけになる。 ●あったらいいな こんなもの (7 時間) 「あったらいいな」と思うものについて、話す順序を考えながら聞き手に分かるように話す。良いところを見つけながら聞く。 ○ショー・アンド・テル (1 時間) 「私の宝物」について実物や絵を見せながら話す。	○絵でんごんゲームをしよう (1 時間) 順序を工夫して分かりやすく話す。正しく聞きとる。 ○おしえてください (1 時間) 適切な質問の仕方を身につけ、相手にいい気持ちで協力してもらえるようになることを目指す。 ○ディベートゲーム (5 時間) ディベートの仕方を学習する。 「好きですか、きらいですかゲーム」 自分の考えを明らかにし、その理由をみんなの前で発表する。 「賛成ですか・反対ですかゲーム」 賛成・反対の両方の意見を考えた後、自分の考えを発表したり、質問したりする。 ○ショー・アンド・テル (1 時間) 「おすすめの絵本」について、実物を見せながら話す。	●一年生へのプレゼント (3 時間) 一年生に、二年生の学習の楽しさが伝わるようなプレゼントとして何がよいか、という話題からそれないように考えを出し合い、聞き合う。 ○ショー・アンド・テル (1 時間) 「二年生になってできるようになったこと」を絵に描き、それを見せながら話す。 ●ことばあそび大会 (3 時間) 言葉あそびのしかたが初めての人にもよく分かるように、順序を考えながら話す。 ○4 つの窓 (1 時間) 選んだ理由や考えを話すことによって、「みんなちがってみんないい」ことに気づく。

2 相手意識・目的意識の明確化

国語科においては、次の五つの言語意識が重視されている。

- ・相手意識（だれとだれが伝え合うのか） ・目的意識（何のために伝え合うのか）
- ・場面意識（どんな場面で伝え合うのか） ・方法意識（どんな方法で伝え合うのか）
- ・評価意識（自分の表現は本当に相手に届いているのか）

言葉で伝え合う力を育成するためには、五つの言語意識のなかでも、特に、相手意識や目的意識を持って主体的に話したり、聞いたりすることが大切である。そこで、相手意識・目的意識を持たせるために、ワークシートや学習形態を工夫した。

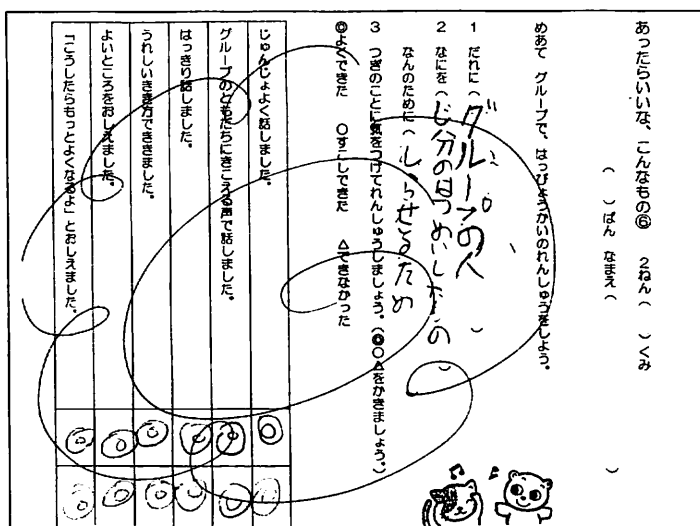
(1) ワークシートの工夫

授業の導入で、今日はだれに話すのか、何を何のために話すのかを発問し、ワークシートに記入させることによって、相手意識・目的意識を持たせるよう工夫した。（資料1）

(2) 学習形態の工夫

学習指導要領に、「第1学年及び第2学年においては、目前に具体的な話す相手がいることによって、より活動への意欲は高まる。」とあることを受け、具体的な言語活動の相手を設定し、その相手に応じて言語活動が展開されていくという学習指導の形態を取り入れた。最初は、自分と相手、次に、4人程度のグループ、

学級全員というように、一対一の活動から、一対複数の活動へと広げていくようにした。このように、学習形態を工夫することにより、相手意識をはっきりと持たせ、相手に応じて声の大きさを変えたり、応答したりすることを目指した。



資料1 相手・目的意識を持たせるワークシート

3 言語環境の整備（話しやすい学級づくり）

学習指導要領総則に、「言語環境を整え、児童の言語活動が適正におこなわれるようにすること」と記されてある。言語環境は、話すこと・聞くことの力を培う基盤である。学級、学校、そして家庭、地域の言語環境を整えることが大切である。ここでは、特に学級での言語環境の整備について、教師、児童、学級の視点から考えた。

- 教師・・・受容的に聞く態度、思いやりのある言葉、明確で具体的な発問、正しく丁寧な言葉遣い
- 児童・・・気持ちの良いあいさつ、思いやりのある聞き方、正しく適切な話し方
- 学級・・・どの子も学級の中で安心して話ができるような雰囲気づくり、積極的に話せるような場の工夫

以上の事をふまえて言語環境の整備を試みた。次の(1)～(4)は具体的な取り組みである。

- (1) ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターを取り入れ、安心して話ができるような学級づくりを目指すと共に、「話すこと・聞くこと」の技能を身につけさせる。（表2）

表2 ☆ソーシャルスキルトレーニングと★エンカウンターの年間計画

1 学期	2 学期	3 学期
☆あいさつリレー（国）	☆仲間の入り方（道）	★にこにこ プンプン（道）
☆友達ふやそう（学）	☆ありがとうっていいな（道）	★友達発見クイズ（生）
★うれしい話の聞き方（国）	☆おしえてください（国）	★4つの窓（国）
★幸せを運ぶ手紙（道）	★ふわふわ言葉とチクチク言葉（道）	★幸せを運ぶ手紙（道）

(2) 朝の会で「お話タイム」を設け、サイコロスピーチをさせることにより、話す事に慣れさせる。

【前日にサイコロを振って話題を知り、家で話す内容について3つ程度考え、ノートにメモする。それから練習する。学校では、できるだけメモを見ないでスピーチする。発表が終わったら、聞き手は質問をしたり、よいところを言ったりする。】(表3)

サイコロスピーチのテーマ表を作成するに当たって配慮したこと

- ① 話しやすいテーマを各月の共通話題として取り入れた。
- ② 新鮮さを出すためにあえて、運動会、学芸会などの学校行事を入れなかった。
- ③ 季節の行事と関連させたものを入れるようにした。
- ④ 児童が興味を持ちそうなものを取り入れた。
- ⑤ 生活科と関連させた話題を取り入れた。

(3) 帰りの会で、グループのリーダーに一日の反省を発表させ、意欲を持って話せるようにする。低学年の子は、リーダーになると喜び、発表時にはりきって話す子が多い。

【4, 5人のグループを作り、毎日リーダーを変えていく。みんなで一日の反省を話し合い、記録用紙に記入する。リーダーになった子は、その日よく頑張ったことや反省するところなどを前に出て発表する。】(資料2)

(4) 「よかったさがし」をし、お互いのよいところを認め合い、よい人間関係をつくる。

【帰りの会で、その日よく頑張った友達や、よいことをした友達を発表し、みんなで拍手を送る。】

表3 サイコロスピーチテーマ表 (★共通話題)

四・五月	★きのう見たテレビ番組
	★あそんだこと
	・好きな友だち
	・きのうやったお手伝い
	・好きな動物
	・好きな食べ物
六・七月	・ねがいごと
	・世界で一番こわいもの
	・好きな乗り物
	・行ってみたいところ
九・十月	・自分が動物だったら
	・おじいちゃん、おばあちゃんのこと
	・先生のこと
	・わたしのじまん
十一・十二	・〇〇さんのよいところ
	・うれしかったこと
	・ほしいもの
	・好きな歌
一・二月	・好きな給食メニュー
	・苦手なもの
	・私の小さい頃のこと
	・大きくなったらなりたいもの

めあて みんながちゃんとしてくる。											
こうもく	めあて	かかりのしこと	あいさつ	名ふだ	わずれもの	つくえの中のせいとん	時間をまもる	そうじ	よいことをした	なかよく	〇の数
氏名											
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
		0	0			0	0	0	0	0	7
よかったこと、なおしたいことなど そうじがちゃんとしてきたこと。 めあてがちゃんとくる											

資料2 グループの反省用紙

Ⅲ 授業実践

1 単元名

話し方をくふうしてはっぴょうしよう

2 教材名

「あったらいいな こんなもの」

3 単元設定の理由

(1) 教材観

「話すこと・聞くこと」の学習教材は3つあるが、単元として扱われているのはここだけである。この学年の中心的な「話すこと・聞くこと」の学習を行うことになる。5月に「ともさんはどこかな」の小教材で、「大事なことをおさえて話す」「大事なことを落とさないように聞く」の学習をしている。ここでは、題材的には特に難しい事柄を扱うわけではないので、自由で楽しい雰囲気の中で、「話すこと・聞くこと」の基礎的・基本的な学習ができる。本教材には、「ドラえもん」のキャラクターが登場していて、児童の興味を引きやすい。児童が、わくわくしながら「あったらいいもの」を考え、その様子や理由について話し合ったり、順序を考えて意欲的に発表したりできる教材であるといえる。また、他の児童はどんなもの考えたのかなと興味を持って発表を聞いたり、相手の良さを発見したりできる教材でもある。

(2) 児童観(省略)

(3) 指導観

児童が話したり、聞いたりする興味を高めるための教材として、「あったらいいな こんなもの」はふさわしい。まず、導入で、「ドラえもん」のビデオを視聴させることにより、学習への興味を持たせたい。次の段階で、「発明者になって、考えた道具をクラスの友達に分かりやすく話す」という目的意識を持たせ、常に「何のために話すのか」ということを意識させる指導をしたい。

また、相手によく分かるように話すためには、話す内容を整理したり、順序を考えたりしなければならない。そのために必要となってくるのがワークシートやカードである。この2つを活用させ、順序を考えて話せるよう指導したい。さらに、ワークシートからカードへ、カードから聞き手の方へと、視線を変えて話せるよう指導したい。

そして、学習形態を工夫することにより、相手意識を持たせると同時に、自信をつけることができるように指導したい。後述するアンケート結果(P40 図2)からわかるように、クラスの半数が人前で話すことへ抵抗を持っている。最初は一对一、次はグループで練習するというように、学習形態を変えながら、相互に教え合う活動を通して、話すことへの抵抗を少しずつ和らげ、自信をつけさせるようにしたい。お互いに良いところやよく分からないことを言い合うことは、よく聞かないとできない。ここで、「大事なことを落とさずに聞く」指導を行いたい。また、学習形態を変えることで「友達に、グループのみんなに、クラスのみんなに」というように相手意識を持たせたい。

さらに、ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターを取り入れ、話しやすい学級をつくることにより、伝えたいことを安心して話すことができるようにしたいと考える。

4 単元の指導目標

- ◎ 話す順序を考えながら、はっきりと丁寧な言葉遣いで、聞き手に分かるように話すことができる。(話・聞一ア)
- ◎ 相手の話を落とさずに聞き、分からないことは質問することができる。(話・聞一イ)
- 発表したいものについて組になった人と話し合って決めることができる。(話・聞一ウ)
- 分からないことを尋ねたり、良いところを教えたりしようとしている。(関・意・態)

5 単元の指導計画

次 (時)	本時のねらい	学習活動	教師の支援	評価規準 □評価の観点 () 評価の方法	手立て ☆Aの子への手立て ★Cの子への手立て
1 (1)	学習への意欲を持つ。	①「ドラえもん」のビデオを視聴する。 ②「ドラえもん」の中で、自分がほしい道具をあげる。	○「ドラえもん」のビデオで学習の意欲づけをする。 ○自分が欲しいと思う道具と、その理由を発表させる。	関 自分が欲しい道具について考え、書こうとしている。 (発表、ワークシート、ふりかえりカード)	☆考えた子は理由も書く。 ★机間指導で個別指導をし、ヒントを与える。
(2)	学習のめあてをはっきりさせて、学習の見通しを持つ。	①単元名から、学習のめあてを知る。「話し方を工夫して発表しよう」 ②「あったらいいな」というものをたくさん考える。 ③発表会をすることを知る。 ④学習の見通しを持つ。	○「ドラえもん」にとらわれずに、自分の生活を振り返ったり、家族に尋ねたりして、あったらいいものを考えさせる。 ○目的意識や目標を持たせる。「発明者になって、自分の考えたことを友達に知らせよう。」	関 学習の見通しをもつことができる。 (ワークシート、ふりかえりカード)	☆書いた子は発表させる。 ★書いた子の発表をもとにして、自分のものを書かせる。
2 (1)	2人一組になって話し合い、あったらいいものを決めることができる。 ＜ペア学習＞	①「話す・聞く」のCDを聞いて、対話のイメージをつかむ。 ②2人一組になって、どんなものがあったらいいか話し合うことができる。 ③イメージしたことを絵で表す。	○話題からそれないように声をかける。 ○上手な対話ができているペアを取り上げ、児童にどこが良かったのか考えさせる。	関 どんなものが「あったらいいか」組になった人と話し合って決めることができる。 (行動観察、ふりかえりカード、ワークシート)	☆できた子はイメージを膨らませる。 ★机間指導により、話し合いの仕方をアドバイスする。
(2)	2人で話す内容を整理したり、カードを並べ替えながら、話す順序を考えたりすることができる。 ＜ペア学習＞	①話す内容・順序について、2人で話し合う。 ②話す内容をカードに書く。 ③カードを並べ替えながら、話す順序を決める。	○聞いている人に分かるように伝えるには、どんなことを話したらよいかつかませる。(教科書の例を参考にする) ○教科書の順番にとらわれず、いろいろ並べ替え、どの順番にすると一番分かりやすいか、実際に話をさせて決めるようにさせる。 ○必要な絵も用意させる。	関 話す内容を整理したり、話す順序を考えたりすることができる。 (行動観察、カード、ワークシート、ふりかえりカード)	☆発表の練習をさせる。 ★教材文を参考にし、考えさせる。
3 (1)	2人で、話す練習をすることができる。 ＜ペア学習＞	①話す内容を分担し、2人で練習する。 ②お互いにアドバイスしながら練習を繰り返す。	○練習を繰り返して、原稿からメモへ、メモから話す相手の方へと、視線を変えて話せるように指導する。	関 相手を意識して、話す練習をすることができる。 (行動観察、ふりかえりカード)	☆はっきりと話す練習をさせる。 ★教師と一緒に練習させる。
本時 (2)	4人のグループになり、交代で発表の練習をすることができる。 ＜グループ学習＞	①二組で、互いの発表の仕方を確認しあい、相互評価をする。(発表をする役と聞く役は、交代で行う。「こうするとともによくなるよ」というアドバイスをしたり、楽しいところ、工夫しているところなどを言ったりする。) ②アドバイスされたことを参考に、練習する。	○アドバイスを参考に、内容や順序の変更もできることを知らせる。 ○CDを聞かせ、どのような発表会をするのかをイメージさせる。	関 相手の話をよく聞いて、良いところや直したら良くなることを教えてあげようとしている。 関 相手によく分かるように話す練習をすることができる。 (行動観察、相互評価、ふりかえりカード)	★練習がうまくできているグループを取り上げ、模範を見せる。 ☆もっとよくなるようにアドバイスをする。
4 (1)	話し方を工夫して自分たちが考えたものを発表することができる。	①2人一組で「あったらいいな」というものについて発表する。 ②聞き手は、わからないことを質問したり、良いところを発表したりする。 ③相互評価、自己評価をする。	○めあてにそって発表したり、聞いたりできるようにする。 ○友達の良さを見つけられるようにするために、教師も、良いところを取り上げて、ほめる。 ○振り返りのためにビデオに録画しておく。	関 話す順序を考えながら、聞き手によく分かるように話すことができる。 関 大事なことを落とさずに聞き、分からないことを質問したり、良いところを見つけたりすることができる。 関 「あったらいいもの」の名前や理由がよく伝わるように、丁寧な言葉遣いで、はっきり話すことができる。 (発表、相互評価、ワークシート、ふりかえりカード)	☆★教師がお手本となり、よいところをほめてあげることによって、よさを見つける視点を与える。

6 本時の指導

(1) 本時の指導目標

- ・相手によく分かるように話す練習ができる。(話・聞ア)
- ・相手の話をよく聞いて、分からないところは質問したり、良いところを教えてあげたりすることができる。(関・意・態)

(2) 授業の仮説

グループで練習し、順序に気をつけて話したり、お互いにアドバイスしあったりすれば、相手によく分かるように話すことができるであろう。

(3) 本時の展開 (6/7)

	学習活動	☆A★Cの子への手立て◎留意点	評価
導入	1 発声練習をする 2 本時のめあてを確認する。 ・グループの友達によく分かるように話そう。 ・よく聞いて、良いところを教えてあげたり、「こうするともっとよくなるよ」というアドバイスをしたりしよう。	◎姿勢や口形に注意して正しい発音・発声で音読するように意識させる。 ◎「よく分かるように話す」ためのポイントをしっかりおさえる。 ・順序を考えて ・聞こえる声で ・はっきりと ◎「うれしい聞き方」を確認する。 ・大事なことを落とさず聞く 他	
展開	3 CDを聞き、二組(4人)でのグループ練習の仕方を学習する。 4 4人のグループになり、発表の練習をする。 ① 二組で、互いの発表の仕方を確認し合い、相互評価をする。(発表する役と聞く役は、交代で行う。) ② アドバイスされたことを参考にして、練習する。 	◎お互いにアドバイスしたり、分からないところは質問したりすることをおさえる。 ★机間指導しながら、話し合いの仕方について良いところをほめたり、うまく話し合いができていないところに、どのようにしたらよいのかをアドバイスしたりする。 ◎グループのアドバイスを参考にして、内容や順序の変更もできることを知らせる。 ☆練習を繰り返し、原稿からメモへ、メモから話す相手の方へと、視線を変えて話せるように指導する。	話 相手によく分かるように話す練習をすることができる。 関 お互いの発表をよく聞き、分からないことは質問したり、良いところを教えてあげたりしている。(相互評価、ふりかえりカード、行動観察)
まとめ	5 自己評価をする。 6 今日の授業を振り返り、楽しかったことやもっと頑張りたいことを発表する。 7 次時の学習を知る。	◎自分を振り返らせ、次の学習への意欲付けを図る。 ◎頑張ったことを発表し、賞賛する。 ◎発表会を開くことを知らせる。	

(4) 授業の分析と考察

本時のグループでの練習において、「順序を考えて・聞こえる声で・はっきりと話す」ことを意識して練習し、お互いにアドバイスし合う学習活動をした。ここでは、次時の発表会で「よく分かるように話すことができたか」を分析・考察する。また、「大事なことを落とさずに聞くことができた」についても分析・考察する。

本時では、「もっと大きな声を出した方がいいよ」「発明品がどんなものかと言った方がいいよ」「立ち方を直すともっとよくなるよ」など、お互いにアドバイスし合っている姿が見られた。しかし、中には質問だけに終わってしまうグループもあったので、「よかったよカード」の「こうするともっとよくなるよ」という項目に記入させると、きちんとできていた。「よかったよカード」を授業の最後に使ったので、途中で使用させればもっと効果があったと考えられる。また、「視線」や「姿勢」についても子どもたち同士で指摘しあっており、「話す時の態度」についても目が向けられたことはよい気づきである。本時では「聞く時の態度」がよくなかったという反省をふまえ、発表会では、自己評価の中に「うれしい話の聞き方」の項目をしっかりと位置づけ、意識させた。以下の①～⑤は発表会の分析・考察である。

① 順序を考えて話す

表4 「ふりかえりカード」より(25人)

	できた	すこしできた	できなかった
順序	22	2	1
聞こえる声	24	1	0
はっきり	24	1	0
視線	19	6	0

順序を考えて話すことが「できた」と答えている児童が25人中22人、「すこしできた」が2人となっている。これは、「順序カード」に事柄の順序を記入させ、順序を意識させる指導を行ったことが効果的であったと考えられる。また、グループで

の練習においてもカードをもとに話す練習をした成果が表れたといえる。「できなかった」と答えた1人については、練習や発表の時にきちんと順序立てて話すことができていた。しかし、自分の中で「もっとできたのに」という思いがあって、厳しい自己評価になったと考えられる。

② みんなに聞こえる声で話す

「できた」と答えているのが24人、「すこしできた」は1人である。確かに、どの児童もグループでの練習時よりは、前に出て発表した時の方が声は大きく、堂々と話していた。このことは、グループでお互いにアドバイスをし合い、それをもとに練習をしたことによって、自信をつけたことの表れである。しかしながら、教師の評価では、「十分な声の大きさ」を出したのは9人、「まあまあみんなに聞こえる声」だったのは13人、「よく声が聞こえなかった」のは3人であった。教師の評価と児童の自己評価にずれがあるが、児童の中で、「みんなに聞こえるような声で話そう」という意識が芽生え、練習時よりは大きな声を出したことについて、自分なりに努力したことを評価した結果であると捉えることができる。「みんなに聞こえる声で話そう」とする意識が高まったので、今後、実際に十分な声の大きさが出せるよう継続した指導をしていく必要がある。

③ はっきりと話す

24人が「できた」、1人が「すこしできた」と答えている。これは、授業開始時に毎回正しい発音・発声・口形の訓練をさせたため、児童が「はっきり話す」を意識するようになったことが伺える。ただし、教師の評価は、「はっきり話すことができる」が2人、残り23人は、「まあまあできる」となった。この結果から②と同様に、年間を通して継続した指導を行い、力を付けていく必要がある。

④ みんなの方を見て話す

「できた」と答えたのは19人、「すこしできた」は6人である。19人は「順序カード」を見ることもなく、みんなの方を見ながら話すことができた。2年生の発達段階で、メモやカード、原稿を見ずに人前で自分の考えを話すことは簡単なことではない。このことから考えても、大きな成果があったといえる。また、「すこしできた」と答えた6人も、カードから時々目線を上げ、みんなの方を見ようと努力していた。「みんなの方を見て話す」ことは、「相手を意識している」ことであり、とても

大切なことである。

⑤ 大事なことを落とさずに聞く

「発明した道具の名前」や、それが「どんなものか」を聞き取れた児童は24人であった。これは、グループでの練習時の反省が生かされた結果であるといえる。また、児童の感想の中に、「友だちの発明品がおもしろかった。」「みんなの発表が聞いて楽しかった。」等、興味を持って聞いていたことが伺える。児童が興味を持って話したり、聞いたりできる適切な教材であったことも、大事なことを落とさずに聞く要素の1つであったと捉えることができる。

Ⅳ 研究の考察

1 興味を持って取り組める教材の選定

発明品を考える学習のとき、ほとんどの子が3つから5つほど考えていた。中には、1人で7つも考えた子もいた。アイデアも様々で、発想豊かな発明品を生み出しているのには驚かされたほどである。その発明品をクラスの人々によく分かるように伝えようという目的のもと、児童は、生き生きと学習活動に取り組んでいた。毎時間、とても楽しそうに活動しており、授業後のふりかえりカードには、ほぼ全員が毎回「楽しかった」と書いてあった。また、発表後の児童の感想に「発表する時、ドキドキしたけど楽しかった」「発表してよかった」などがある

ことから、興味を持って話せる教材を選定し、主体性を大事にした指導を行った結果、「話してよかった」という思いを抱かせることができたと考えられる。「話してよかった」という思いが、これからの話す意欲につながっていくであろう。



写真 発表の様子

2 相手意識・目的意識を明確にした指導

単元を通して、常に「何のために話すのか、だれに伝えるのか」という相手・目的意識を明確にした指導を行った。「今日は、隣のお友達に」「グループの友達に」「クラスのお友達に」話すというように、一対一の活動から、一対複数の活動へと学習形態を変えながら練習する指導を取り入れたことにより、児童は相手を意識して話したり、発明品をよく分かるように伝えようという目的をしっかりと持って話したりすることができるようになった。話すことや聞くことが好きになった理由として、「みんなのことがわかるから」「みんなに知らせたいから」ということもあがっていた。相手に分かってもらいたい、相手のことを知りたいという気持ちの芽生えである。

「授業の分析と考察」で先述したが、全員が時々、あるいは終始相手の方を見ながら話していた。さらに、学習形態を変えながら学習する中で、相手に応じて声の大きさを調節しながら話すことを意識するようになった。また、図1では、24人が「うなずきながら聞くようにしている」と答えていることから、相手の立場になって聞こうとしていることが分かる。これらの結果は、相手意識・目的意識を明確にした指導の成果といえる。しかし、よそ見をしたり、手遊びをしたりする子がまだいるので、継続指導をしていきたい。

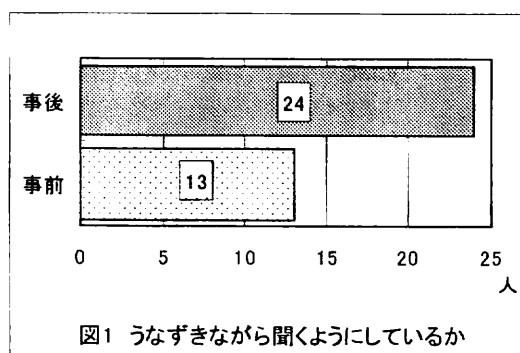
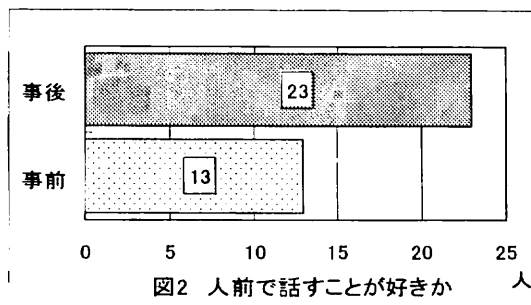


図1 うなずきながら聞くようにしているか

3 言語環境の整備

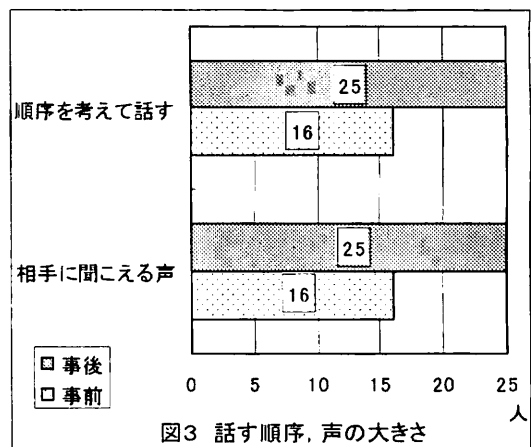
朝のサイコロスピーチや、帰りの会でのリーダーの一日の反省スピーチなど、話す場の設定を工夫した。また、ソーシャルスキルトレーニングやエンカウンターで話す・聞く訓練を行うとともに、相手のことを受け入れる雰囲気作り、話しやすい雰囲気作りにも配慮した。それにより、児童は少しずつ自信をつけ、話すことへの抵抗が和らぎ、話すことが好きになったと考えられる。図2からも分かるように、言語環境の整備が有効であったと言える。



4 伝えたいことをよく分かるように話そうとする児童の育成

低学年において、「よく分かるように話すこと」とは、「順序を考えて話すこと」であり、目標として一番に掲げられている。この研究では、「声の大きさ」も重要であると捉えて2つの視点から分析・考察してみた。

「順序を考えて話す」や「相手に聞こえるような声の大きさで話す」の項目では、図3のアンケート結果から、事後、9人の意識の高まりを確認することができ、全員が順序に気をつけて話すようになったことが分かる。また、「相手に聞こえるような声の大きさ」で話すことを全員が意識していることが伺える。この結果から、伝えたいことを相手によく分かるように話す児童が育成できたと言える。しかし、声の大きさに関しては、まだまだ十分だとは言えないので、継続した指導が必要である。



V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 興味を持って取り組めるような教材・話材を選定することにより、「話したい、聞きたい」という思いが高まった。
- (2) 相手意識・目的意識を明確にした学習指導をすることにより、「相手に伝えたい」「相手のことを知りたい」という気持ちを持たせることができ、相手を見ながら話したり、うなずきながら聞いたりすることができるようになった。
- (3) 言語環境を整備することにより、話すことへの抵抗が和らぎ、話すことが好きな子が増えた。
- (4) 学習形態の工夫や順序カードの活用によって、声の大きさや順序を意識して話すことができるようになった。

2 今後の課題

- (1) 学校全体を通しての系統立てた指導の取り組み
- (2) 聞く態度を定着させるための全教育活動を通じた継続的な指導

<主な参考文献>

- | | | | |
|-------|----------------------|------|-------|
| 小森茂著 | 『「伝え合う力」の育成と音声言語の重視』 | 明治図書 | 1999年 |
| 野口芳宏著 | 『音声言語の学力形成技法』 | 明治図書 | 2001年 |